

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

「死」と「死にゆくこと」の人類学：「看取り文化」の新たな地平に向けて＜共同研究：現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究＞

メタデータ	言語: ja 出版者: National Museum of Ethnology 公開日: 2020-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浮ヶ谷, 幸代 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009588

「死」と「死にゆくこと」の人類学

— 「看取り文化」の新たな地平に向けて

文 浮ヶ谷 幸代

現代の日本社会では、自宅で最期を迎えるという伝統的な「看取り文化」はすでに失われている。本プロジェクトでは、古い、終活、ターミナルケア、死、葬儀、墓に至るまでのプロセスを視野に入れ、広義の「看取り文化」の再構築を目指してきた。そこで、「看取り文化」を「地理的にも人口的にも『顔の見える関係』が成り立つ、ある一定のローカルな地域において、そこで生活する人たち（本人、家族、専門家、行政職員、ボランティア、近隣の人など）が志向する生と死のあり方とそれをめぐる実践のあり方のことである」（浮ヶ谷 2019: 282）と定義し、現在生まれつつある看取り実践の生成プロセスに焦点を当てている。

1970年代を画期として最期を迎える場所が自宅から病院へと移行し、看取りをめぐる「死」と「死にゆくこと」の意味は大きく変容した。高齢多死社会でいかに、だれと、どこで、最期を迎えるか、というテーマは近い将来「死」を迎える高齢者だけでなく介護ケアを担う家族や専門家にとっても喫緊の課題となっている。本プロジェクトでは、日本の「看取り文化」を構想するために、海外での看取り実践の報告を参照し、エスノグラフィックなデータを集めてきた。そこで、次にプロジェクトから得られた3つの知見、学術的意義、今後の課題について報告する。

ケアのあいまいさとケアへの読み替え

看取り現場のケアで問題となるのは、フォーマルケアとインフォーマルケアとの混在である。日常生活では切り分けることができない2つのケアは、死にゆく人の周りで不協和音を生じさせている。本人や家族が希望することが、保健医療制度や介護保険制度によって分断されているためである。それに対して、家族や施設スタッフが本人の人生歴を想起し、本人の希望に添うようなケアを優先的に提供している施設がある。このケアは今日の専門職がきわだつ社会では「それはケアなのかケアではないのか」という「あいまいなもの」として認識されるが、その「あいまいさ」にケアの価値を見出し、フォーマルとインフォーマルとの分断を超えたところに関係者間の対話を創り出している現場がある。また、現代日本の葬祭業の現場では、サービスという市場原理から消費者の倫理的、心理的な要請に合致したサービスをケアへと読み替える、新たなケアの解釈が生まれている。つまり、ケアの提供者を外注化するという意味での「ケアの社会化」とは異

なる文脈で、ケアの市場化の新たな側面が見えてきたのである。

死にゆく人の意思

医療人類学者のアネマリー・モルによれば、自己決定は西洋的自我を前提とする幻想であり、西洋社会でさえ自律的自己などあり得ず、個人ではなくコミュニティもしくは家族の条件によって決定されると述べている (Mol 2008)。日本でも約60%の人が住み慣れた場所で最期を迎えたいと思っているにもかかわらず、周囲や家族に「迷惑をかけたくない」という理由で病院死を選択している。他方で、「死に方ぐらい自分で決めたい」という動きがある。その1つが終活であり、日本社会にも浸透しつつある。終活の主たる活動は「元気なうちに自分の意思を書面に残す」というものだが、書面上の意思表示ではなく、死にゆく人が強い意思で周囲を巻き込み、在宅死を実現させている事例がある。死にゆく人の意思への着目は、死生観に対する新たな地平を生み出す可能性があるが、看取る人にとっては精神的、体力的、社会的に困難を伴うことが多い。しかし、結果的に巻き込まれた周囲の人は「思いを遂げた在宅死」という肯定的なイメージを持ち、死を「わがこと」として考えるようになる。これは病院死という社会の常識を覆す機会となり、死にゆく個人の強い意思による在宅看取りが遺された人によって継承され、新たな「看取り文化」が生まれる契機となるかもしれない。このことは個人対コミュニティという二項対立を超える可能性を秘めている。



利用者の家族とスタッフによるSさんのお別れ (2016年11月、神奈川県藤沢市 小規模多機能ホーム〈ぐるんとびー〉、菅原健介撮影)。



秋田県能代市二ツ井町の社会福祉法人（二ツ井ふくし会）が独自に発行している「あんしんノート」（2020年6月、岩手保健医療大学 相澤出研究室、相澤出撮影）。

場所性と地域

本プロジェクトでは、最期を迎える場所を単なる居住空間の問題ではなく、死にゆく人や家族、施設スタッフが本人の意思を尊重、もしくはその思いを想起することで、それを乗り越える「自宅ではない在宅」として捉えた。神奈川県藤沢市のUR住宅の小規模多機能ホームは、UR住宅のルームシェア制度を利用し、家族関係の調整や経済的問題に対処しながら看取りも行い、「地域まるごとケア」に挑戦している。入所者が自宅と施設を往還する「ホームカミング」に取り組む秋田県能代市二ツ井町の高齢者施設では、地域独自の「あんしんノート」を作成し、在宅看取りと「ホームカミング」の実践例を掲載している。また、伝統的な「看取り文化」が消滅した北海道えりも町で在宅看取りを選択できるように、町民や将来の利用者が集まって「地域デザインミーティング」を開催し、地域住民の間に「住み慣れた場所でいつまでも」という世論を形成する試みがある。死にゆく人の来歴やアイデンティティ、尊厳、安心や安全が確保され、地域と結びついた自宅のような場所であれば、死にゆく人の思いが遂げられる地域となる。他方、日本各地の政令指定都市では近年無縁者の死が増加傾向にあり、その人たちの葬儀と墓の問題は行政や民間業者が担っている。家族や地域社会から孤立した高齢者が、公的な支援によって再び地域社会に包摂されるかどうか、地域のあり方が問われている。「個人の自由」が強調される現代社会で、ローカルな地域で共有される「死」と「死にゆくこと」の文化の生成を捉えるために、地域という広義の視点でアプローチすることに意味がある。

「死の人類学」と「老いの人類学」との架橋

これまで「死の人類学」研究は葬制・儀礼と墓の研究が中心であったが、地域文化の変容と伝統的な「死の文化」の喪失は日本各地で顕著である。病院死が約80%を占める日本で「看取り文化」を構想する際には、医療・福祉・介護の専門家とのかかわりを視野に入れることは不可欠である。他方、「老いの人類学」研究は、国内外の事例から、老いの文化的価値や高齢者の家族関係、国家の高齢者政策を視野に入れて取り組まれてきた。したがって、「看取り文化」の射程として老いから介護期、そして看取り期、葬儀や墓の問題という、

浮ヶ谷 幸代（うきがや さちよ）

相模女子大学名誉教授。専門は文化人類学と医療人類学、ケア研究や医療・福祉の専門性研究。編著書に『苦悩とケアの人類学』（世界思想社 2015年）、『苦悩することの希望』（協同医書出版社 2014年）などがある。



小規模多機能ホーム開設のための地域デザインミーティング。手前左：図面を広げるC設計士（2018年3月、北海道えりも町O邸、浮ヶ谷幸代撮影）。

人間の一生を視座に入れた本プロジェクトは、「死の人類学」研究と「老いの人類学」研究を架橋する視座を提供できると考える。東南アジアにおける高齢者ケアの研究は、限られた社会資源の中で家族や親族、近隣住民の柔軟で多様なケアの仕方を示すものであり（速水編 2019）、医療・福祉・行政が強いかかわる日本の高齢者ケアのあり方に再考を促している。東アジアの中でも高齢化と死の医療化が高度に進む日本社会で、新たな「看取り文化」を提示することは東アジアにおける高齢者ケアについての人類学的研究に寄与すると考える。

今後の課題

本プロジェクトの成果として論文集を刊行する予定である。成果を社会全般に広報することで、文化人類学や社会学、民俗学などの人文社会科学の学術分野だけでなく、高齢者世代とその介護世代という高齢者に与える影響は大きいと推測する。また、日本の高齢者政策や医療・福祉システムへの提言を含み、看取りにおける介護などの実践面での新たなビジョンを提供できるものとする。今後、一般市民向けのシンポジウムを開催し、若い世代とともに「死」と「死にゆくプロセス」について考える機会として企画したい。

引用文献

- 浮ヶ谷幸代 2019「日本における『看取り文化』を構想する—死と看取りをめぐるケア、選択、場所性をてがかりに」『文化人類学』84(3): 281-294。
- 速水洋子編 2019『東南アジアにおけるケアの潜在力—一生のつながりの実践』京都：京都大学学術出版会。
- Mol, A. 2008 *The Logic of Care: Health and the Problem of Patient Choice*. London: Routledge.